ZOSHIGAYA MISSIONRY MUSEUM

雑司が谷旧宣教師館だより

第35・36合併号
2005年11月1日発行

豊島区立雑司が谷旧宣教師館
〒171－0032 東京都豊島区雑司が谷 1－25－5 Tel/Fax (03) 3985－4081

私の小さな故郷 雑司が谷

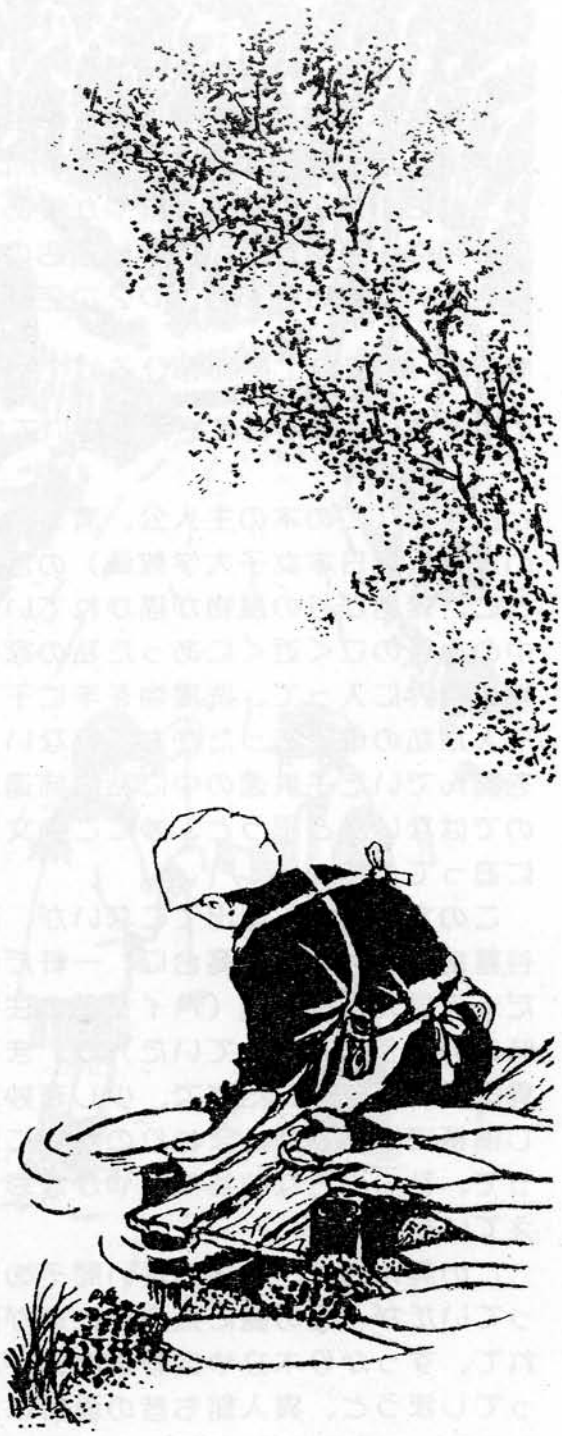
本吉 瑠璃夫

私の生れは、東京の雑司が谷である。細かく言うと、東京府北豊島郡高田町大字雑司ヶ谷字古木田（現・雑司が谷２丁目あたり）である。護国寺に近い雑司ヶ谷墓地（霊園）から尼寺（薬王菩薩安置清立院）のある坂をおりて、鬼子母神へ抜ける道筋に、わが家があった。この坂道の下に、小川が流れていて、洗場と呼ばれていた。おそらく、大正の初期までは、この辺り一帯が大根を主とする野菜畑で、地元のお百姓さんが、野菜についた土を小川で洗い落とす場所で、この名がついたのであろう。

国木田独歩の『武蔵野』を読むと、鬼子母神をとりまく雑司が谷が、武蔵野の起点になっていて、「武蔵野の詩趣を描くには必ず此町外れをひとつの題目とせねばならないと思ふ」と、そして、大根畑については、「大根の時節に近郊を散歩すると、此等の細流のほとり、至る処で、農夫が大根の土を洗って居るのを見る」と書かれている。

大正４年頃、父が雑司が谷に居を移した少し以前から、大根畑の地主達が、時代の流れに従って畑を宅地に変えて、売地或いは貸地としたので、市内に勤めるサラリーマン達の住宅がぽつぽつ建ちはじめたものと思う。

林えり子の『日本女子大桂華寮』（昭和63年、新潮社）に、「いつの間にか雑司ヶ谷の森に濃き薄き紅葉が彩りはじめていた。（大正９年９月、筆者注）。空は高く人の姿がやけに小さくみえる。子供が岸で花を



弦巻川の洗場で
（弦巻川は現在は暗渠となり今は上が道路になっている）

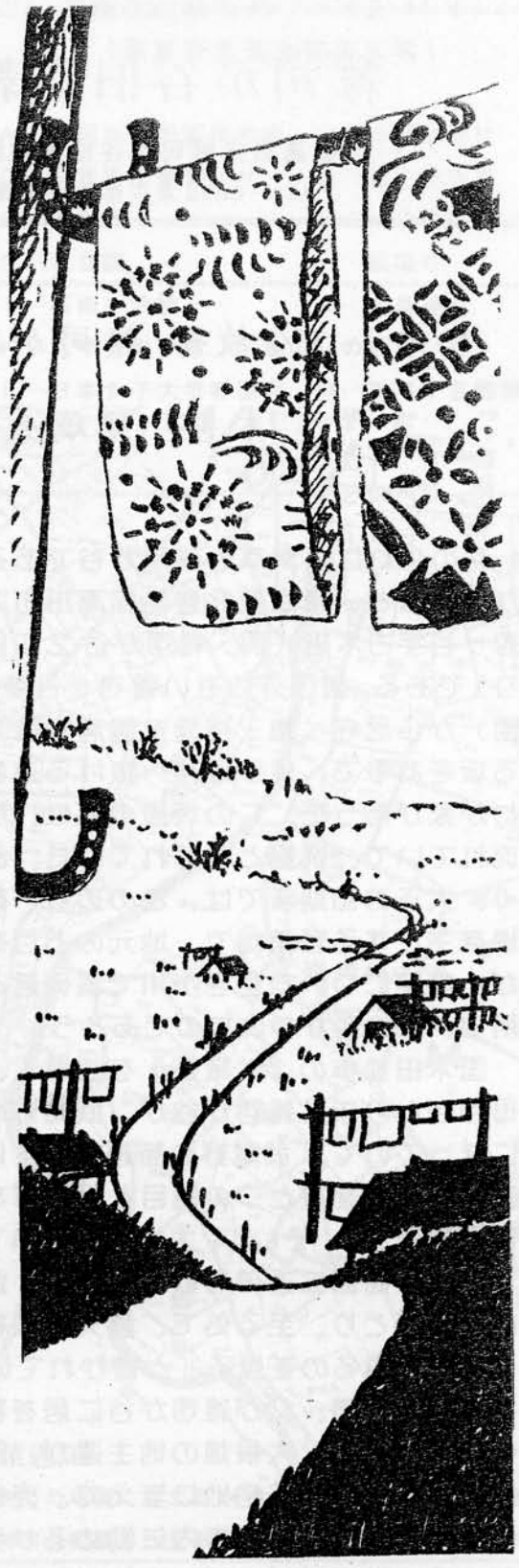
摘み、農夫が畑を掘っている。流れにわたした丸木橋のふもとでは大根を洗い、かたわらにつみ上げた大根の白さがまぶしい。秋は足早に訪れていた。晩秋の金山（桂華寮の所在地、筆者注）から雑司ヶ谷にかけての小径は、散策にうってつけであった。八千草の畔をふみわけて行くと、そば畑があり、大根畑がある。小川に沿って上手に行くと、近頃建った新しい家がひっそりと並んでいた。

洗濯ものを竿に干す女のひとの姿がのどかであった。屋敷のあとなのか、荒れた広い土地に山茶花の紅色が鮮やかである。鬼子母神は、祭りが近いのか、茶店の掃除もゆき届いて露店がもう１つ２つ店開きし、栗だの梟（ふくろう）だの土産物をひろげていた。その中を念仏太鼓がさえざえと響いていた」

と山原鶴（この本の主人公、清楽茶道会野の家元　元日本女子大学教員）の言葉をもとに、雑司が谷の風物が描かれている。文中の小径のごく近くにあった私の家も山原鶴の視界に入って、洗濯物を竿に干す女の一人が私の母であったかもしれないし、花を摘んでいた子供達の中に私の姉達がいたのではないかと思うと、妙にこの文章が身に迫ってくる。

この文章の中には出てこないが、雑司ヶ谷墓地に続いていた高台に、一軒だけきわだって見える異人館（ハイゼ氏の住宅で当時このように呼ばれていた）が、まことに異国風に、シャレた姿で、少し奇妙に、少し横柄ではあるが、まわりの風物に溶けあって、私の小さな故郷に花やかな彩りを添えていた。

この異人館は、戦後も長い間そのまま残っていたが、岡の麓に無造作に家が建てられて、すっかり木立や広野原の緑がなくなってしまうと、異人館も昔の面影は全く失われて、いたずらに老朽した残骸をさらすにすぎなくなっていて、いつの間にか取り壊されてしまった。もう一つの洋風建築、



着古しの浴衣はオムツに再利用された

マッケレブ師の住家は、私の幼稚園の同級生で、『わがまち雑司が谷』を発行し続けておられる前島郁子さんをはじめとする地元関係者の熱心な保存運動で、豊島区の建物として買い取られ、洋風古建築（明治 40 年建立）として残されることになり、修復されて、現在「豊島区立雑司が谷旧宣教師館」として一般に公開されている。思い出の縁（よすが）となる建物が、次々と失われていく時に、三歳の時から教会の付属幼稚園にかよい、卒園後小学校時代は姉とともに日曜学校の生徒であった私にとっては、この建物は、残された故郷を託した建物のようにさえ思われて大変嬉しい。

幼稚園時代の一番楽しかったことと云えばクリスマスの夕べで、園児の家族達が集まるみんなの前で、同級生の女の子達と一緒に舞台で歌ったり、踊ったりすることができたからである。たとえ、他愛のない、“ドングリコロコロ”のお遊戯であったとしても。

クリスマスの夕べも終わって、帰りの尼寺前の坂道にどっさり雪がつもり、ちいさな長靴が雪にもぐって、なかなか抜けない。木立から僅かに見える空は、どんよりと重く真暗で、白い雪が、雪だよ、雪だよと声をかけて舞い降りてくる。眼の前には白い白い原っぱが、いつもとは別人の顔で迎えてくれる。視界の一番遠くの岡の中腹に、例の異人館が白い装いも新たに、夢の国のお姫さまの館にように、ロマンチックな明かりをつけて、私にいらっしゃいと呼びかけてくる。

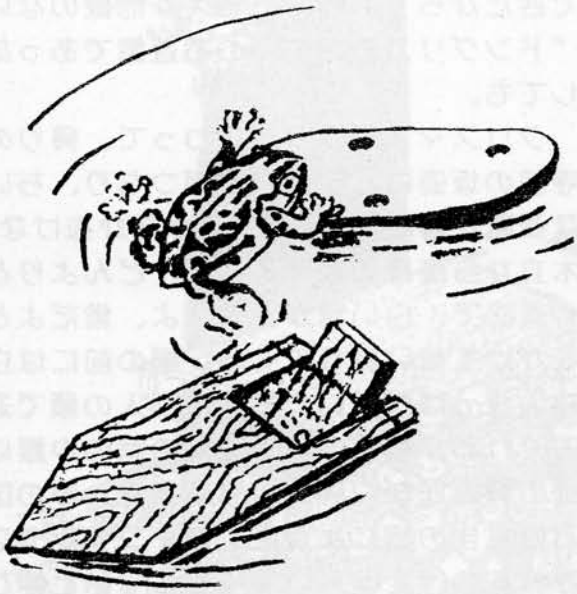
雪の日の白い原っぱには牧場があって、幼稚園の同級生の園田泰子さんや阿部春子さんによると、数頭のホルスタインが放牧されていたと云う事である。ホルスタインによって演ぜられる田園の風物詩とは別に、幼稚園から小学校時代には、雑司ヶ谷墓地から大鳥神社を通って鬼子母神へ抜ける道筋には、まだ武蔵野の自然が残されていて、自然を相手に遊ぶことには事欠かなかった。春はレンゲの花摘みか、小川の笹船流し。

雪景色が美しい清立院前の御嶽坂

夏の暑い日には、鳥黐を買ってきて、唾で伸ばしながら細い竹の棒に塗りつけ、大物のトンボや蝉を追っかける。初秋になると、雑司ヶ谷墓地を中心にむかごを探し、家に持ち帰って茹で上げ、楊枝でさして一つ一つ自然の味を味わうのが楽しみであった。どんぐりや椎の実をあつめて独楽をつくり、このような他愛のない遊びに満足しなくなると、そこで思いついたのが筏乗り。大雨が降って、原っぱの窪地に池のような水溜りができると、早速古い張板を持ち出して、その上に乗り、水スマシまがいの筏乗り。けっこうスリルのある小冒険で、台風のころには、内心大雨の降るのを願っていたことさえある。時には、張板から水溜りへ落っこちて、泥まみれになり、大目玉を食らうこともあった。

水溜りが浅ければ、蒲鉾の板などで小さな帆掛船を作り、風力か輪ゴムを動力に、船遊びに切り替えるのである。

秋から冬にかけては、勿論凧揚げである。東京では秩父おろしの北風が吹くときが多い。異人館下の原っぱのなかで、稍々小高いところからの凧揚げが、風のある日の日課である。小学校高学年になってからのことであるが、この頃には牧場はなかったように思う。タイミングよく風を受けて、電線さえ越えれば、大きな建物等の障害物は全くなかったので、凧は無造作にスルスルとあがっていく。凧糸を出しきるまでの緊張が終わって、糸巻に伝わってくる凧の引力、凧に襲いかかる風の圧力をじかに手に感ずるようになればしめたもの、凧揚げの醍醐味が味わえて、凧の子は風の子となって、心は空高く舞いあがる。時には風との駆引きで、凧糸の繰り出し、引き戻しを激しくくり返し、風がかなり強い時は、凧糸



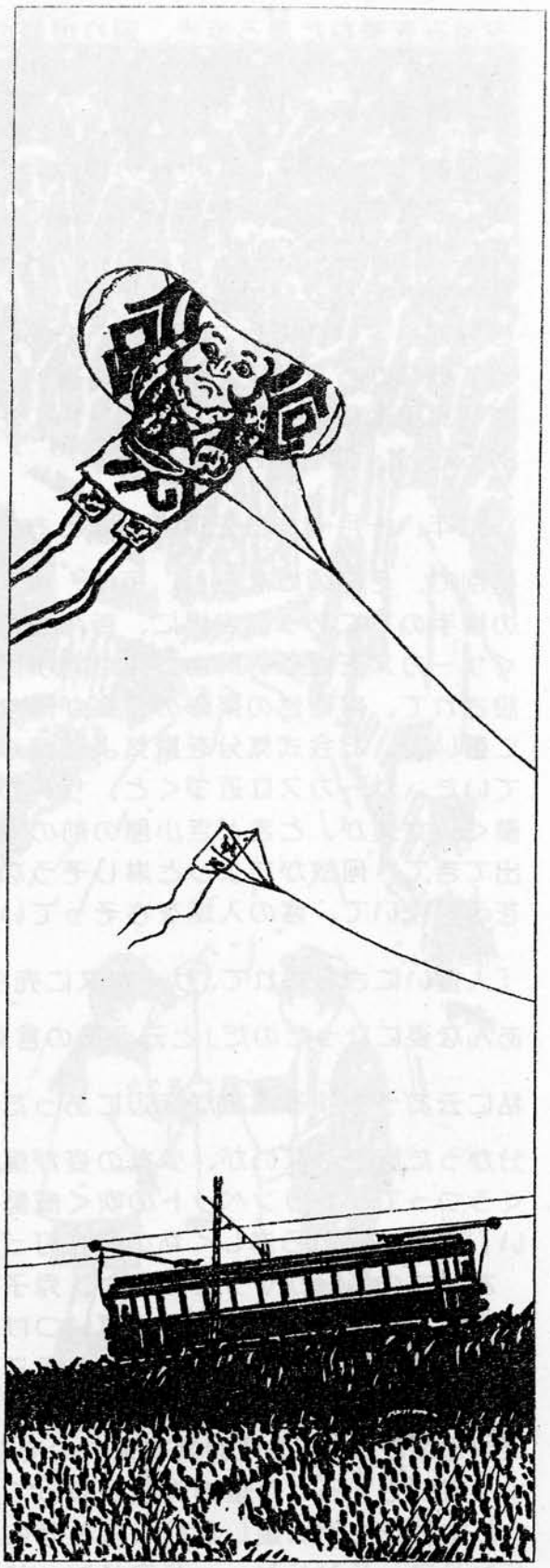
蒲鉾板で作った輪ゴム動力の舟

と接触する人差指のつけねが切れて、血みどろになりながらも、それでも凧揚げをやめようとはしなかった。ウナリのつけ方も苦心をしたが、高く揚がる凧と、宙返りばかりする凧とを見分けて買うことが肝心であったし、駆凧は絶対に禁物であった。買凧にあきた頃、家に下宿していた高知出身の学生さんに、ヒョロヒョロ凧の作り方を教えてもらって、自製の凧を作る頃には、凧揚げの興味も次第に薄らいで、私の凧揚げ一代記も最後の頁に近づいていた。

剣玉も誰にも負けなかった。二本糸でのヨーヨーの高等技術もこなした。竹馬、独楽(べいごま)面子(めんこ)、ビー玉、石けり、古い自転車の車輪回し、罐詰(かんづめ)の下駄(げた)ばき、なんでも遊んだがヨーヨー以外は剣玉のように上手にはなれなかった。

神輿(みこし)かつぎは水をふんだんにかけられた記憶があるから夏の行事だったと思う。樽(たる)神輿だって決して軽くはないし、派手な祭りの衣装も気恥ずかしく、やたらと大人達が騒ぎ立てて、子供は添え物のような感じで、あまり子供衆の中に溶け込む気持ちにはなれなかった。私が一人だけ、地元の小学生でなかったことに、その原因があったのかも知れない。地元の小学校は高田小学校である。

祭りには冷めた感じであったが、毎月八の日の鬼子母神の縁日はたのしかった。夕方になれば、夜店（露店）がびっしりと並び、それぞれに違った色と香りの商品を、思い思いの掛け声で売捌く(うりさばく)露店商人の姿には、独特の人生が感じられ、アセチレンのガス燈の匂があやしく人をひきつけ、顔みしりの多い人ごみの中で、街の人々の触れ合いの暖かさを感じて、いつまでも去り難い風情があった。特に夏から秋にかけて、



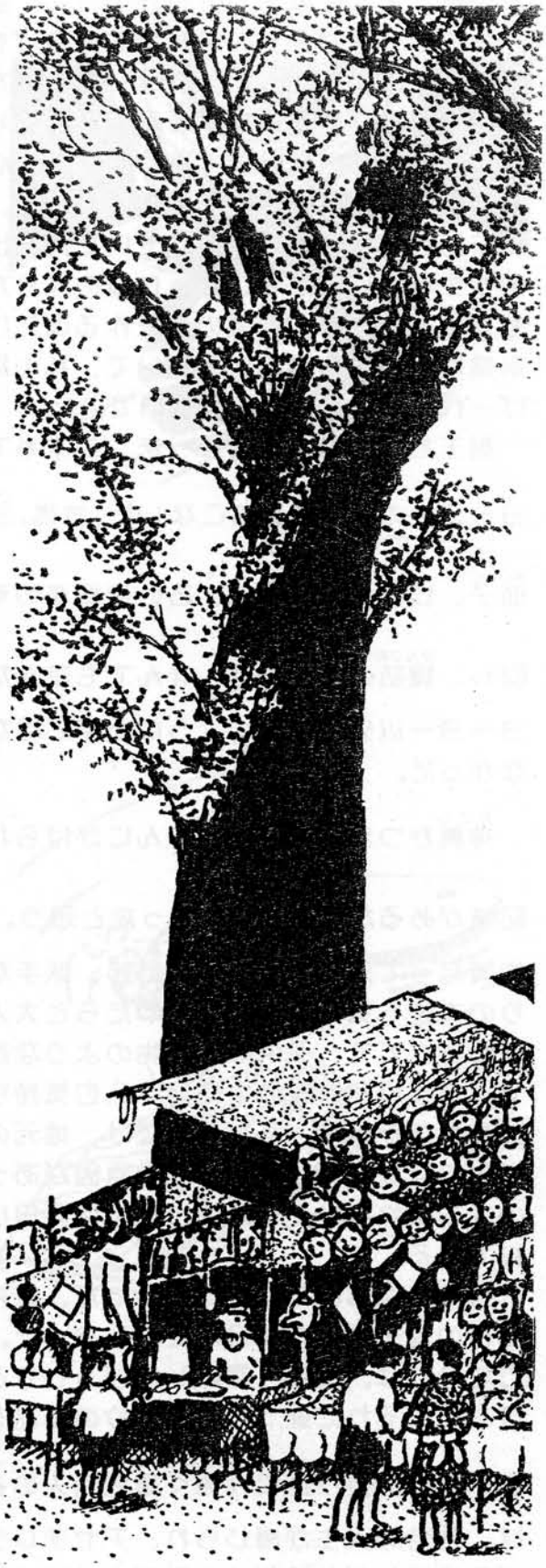
原っぱ（異人館下はこう呼ばれていた）は格好の凧揚げの場所であった

夕涼みを兼ねた漫ろ歩き、廻り燈籠の光と影、酸漿の赤さ、すすきで作った木菟が風に揺れるのを見ては、少年の夢は何かを求めて遠くに拡がる。美味しそうな匂いを、あたり一面にただよわせるドンドン焼（お好み焼）に食欲がそそられたが、買うことは許されていないし、お小遣いもあまり持っていなかったので、せいぜい買い物は、青写真用の種紙とうつし紙ぐらいのものであった。

毎年、十月十八日を頂点とするお会式は格別で、その頃になると、毎年、鬼子母神の横手の下にあった広場に、街々を廻り歩くサーカスをはじめ沢山の見せ物小屋が架設されて、客寄せの楽隊の音楽が高々と空に響いて、お会式気分を景気よく盛り立てていた。サーカスに近づくと、サーカスで働く少女達が、ときどき小屋の前の舞台に出てきて、何故かちょっと淋しそうな笑顔をふりまいて、客の入場をさそっていた。

「人攫いにさらわれて、サーカスに売られ、あんな姿になったのだ」と云う母の言葉が、私に云おうとする真意が奈辺にあったのか、分かった訳ではないが、少女の姿が痛々しくうつって、トランペットの吹く威勢の良い『青空』も、うら淋しく私の胸を打った。

お会式の当日がやってくると、鬼子母神へ通じる表通りの、私の家の買いつけの煮豆屋か酒屋の店先に特設の見物席をこしらえてくれる。護国寺を万燈行列の先頭が出発する頃から、その見物席で待つのである。小一時間もすると万燈の先頭がやってくる。念仏太鼓を上手に廻しながら打ちならす。ドンドコ、ドンドン　、ドコドン、ドンドコ、ドンドン、ドコドンの響きがすさまじく腹にしみ込む。カー杯万燈を振り上げ、振り下げて、傘形の骨いっぱいに、幾重にもとりつけた胡蝶のごとき花房が虚空に舞いあがる。一つ、二つ、三つと…各町内の



鬼子母神境内の露店
（夜はアセチレン灯がともり、夜店と呼ばれていた）

万燈が通りすぎ、やがて見物席をしつらえた町内の万燈が通る頃にはもう街中が熱狂の坩堝の中で煮え滾る。少年の心も高鳴って、喧騒な街と同化する。

十一月の酉の日、大鳥神社の酉の市（おとりさま）は神楽が出るので、一風変わった興趣があった。私の家は商家でないので、きらびやかな熊手を買う訳ではなかったが、舞台でおどけた仕草をする、ひょっとことおかめの神楽が面白くて、狭い境内の雑踏のなかで、小さな身体を背伸びさせて、ひょっとことおかめの姿を追っていた。なにかかけ合いの漫才のような科白を云っていたようだが、何のことか分からず、どんな人がやっているのか、素人か、セミプロか、思いめぐらしたが、旅回りの芸人であったのかもしれない。

幼稚園を終えてからも、小学校を卒業する頃まで、私は日曜学校に通っていた。キリスト教とは縁のない家庭に育っているので、両親から勧められたとは思われないが、幼稚園の延長のような気分で、姉と一緒に自然に足を運んでいたのであろう。家で貰った一銭玉を汗がつくまでしっかり握って、教会で献金箱の中に入れ、聖書の中のひとつの説話をあらわした、極彩色のカードを貰うのが楽しみであった。教会に対して失礼な言い方で申し訳ないが、キリスト教を信仰するまでに、キリスト教の教えが身につくことはなかったが、賛美歌はどれも美しいメロディーで、今でもかなりの賛美歌を口ずさむことができる。

雑司が谷には映画館はなかったと思う。それでも、夏のお盆の晩など、近くの高田小学校の校庭に架設されたスクリーンで、剣劇映画等を何回かみている。しかし心をこめて映画を見るまでには、少年倶楽部の「敵中横断三百里」（山中峰太郎作）、「モンテ・クリスト伯」（アレクサンドル・デュマ作）、「クオ・ヴァデイス」（シェン・キェヴィチ作）、「緋文字」（ホーソン作）等を夢中

千登世橋を渡って集合場所に向かう万灯

になって読み耽っていた時期が続いたのである。

やがて、池袋近くの喫茶店などから「巴里の屋根の下」の主題歌が流れてくる頃になると、雑司が谷の自然と色濃くかかわりのあった無邪気な幼少年時代は終わろうとしていた。

本吉瑠璃夫氏　京都府立大学名誉教授

大正9年雑司が谷生れ、昭和2年3月、マッケーレブの創設した雑司ヶ谷幼稚園卒園。著書に『先進林業地帯の史的研究』（玉川大学出版）等の専門書や、60年間で見た1800本の映画への熱い思いを綴った『私の三本立映画館』（近代文芸社）がある。

挿絵によせて

矢島勝昭

本吉教授の清澄な文章に接し、萎縮しないよう、思い切って縦長の構図をとって非力を庇いました。しかし、教授の雑司が谷と十年後生れの私のそれが通用するかどうかは自信がありません。あくまで私の心象と想像のミックス風景であります。

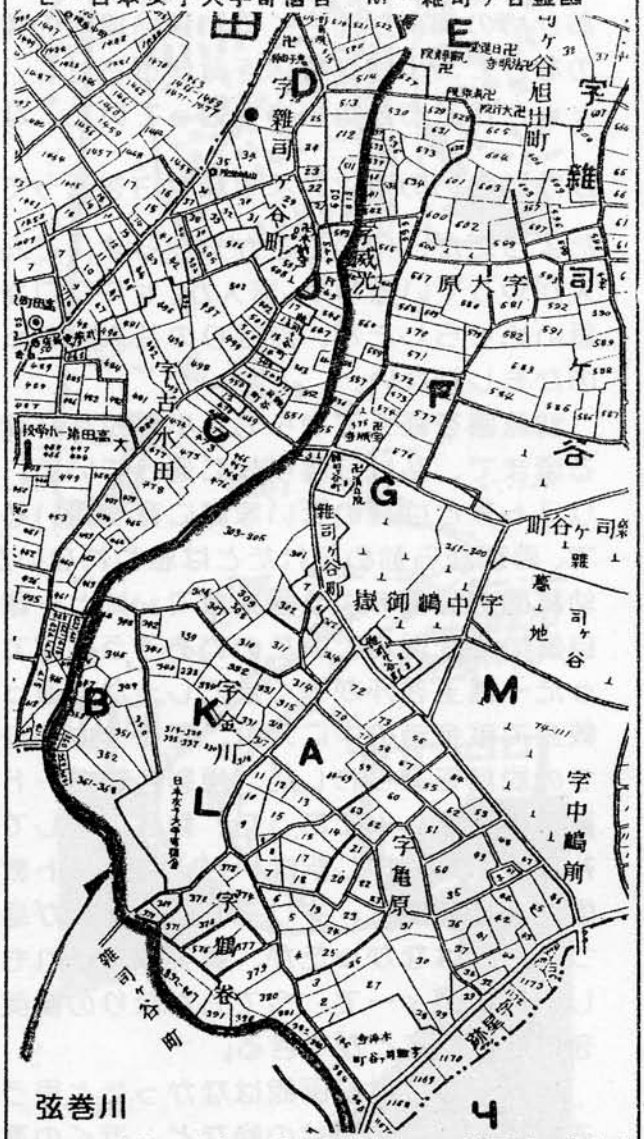
なお、末尾の異人館の絵は、雑司が谷旧宣教師館からお借りした写真から起こしたものであります。

矢島勝昭氏　地域史研究家

昭和4年雑司が谷生。『豊島区史・通史編二』等のイラストを描く。著作に『画文集／二十世紀の情景／池袋・雑司が谷』等。雑司ヶ谷霊園に「御鷹部屋と松」碑の建立や風車や角兵衛獅子の雑司が谷郷土玩具の復元を行うなど多彩な地域活動を行っている。

当時の近隣地図　（大正14年）
（東京府北豊島郡高田町）

A…雑司が谷旧宣教師館　B…文芸春秋社
C…本吉氏生家あたり　D…鬼子母神堂
E…法明寺　F…ハウゼの家
G…清立院　H…護国寺
I…高田小学校　J…大鳥神社
K…「字金川」は「字金山」の間違い
L…日本女子大学寄宿舎　M…雑司ヶ谷霊園



※この地図には大正14年11月12日に大塚駅～鬼子母神まで開通した王子電車の軌道は記入されていない。

編集後記：武蔵野の面影がかすかに残る昭和初期の雑司が谷。此処で生れ育ったおふたりの心象風景が絶妙のバランスで再現され、語り継いでいきたい故郷の記憶がまたひとつ形になりました。有難うございます。人柄が彷彿とする語り口のやさしい文章と詩情溢れる挿絵に往時が偲ばれます。（文責浜地）